

居酒屋の正論

諸井 薫



中公文庫



中公文庫

いざかや せいろん
居酒屋の正論

定価はカバーに表示してあります。

1998年7月3日印刷

1998年7月18日発行

著者 もろい かおる
諸井 薫

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA, INC. / Kaoru Moroi

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203184-2 C1195

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

居酒屋の正論

諸井 薫



中央公論社

目次

居酒屋への回帰	9
政治のコスト	15
気になるコマーシャル	21
“広報”下手	27
世は逆しま さか	33
似非民主主義 えせ	38
一意専心	44
お祭り嫌い	50

関係消費 55

「科学」の復活 61

株式会社のようなもの 67

清新とは「素人」のことか 73

クジラと「牛の目ん玉」 79

棄権の理由 85

嬭^{かかあ}天下 91

命の重さ 97

お礼奉公 103

変節 109

へそ曲がり // 金丸信論 // 114

統一教会叩き 120

社長の給料 126

呑む・打つ・買う 132

晩年の憂鬱 138

噓し殺し 144

ビジネス・ランチ 150

就職学生諸君！ 156

私説 上杉鷹山 162

ヤラセだらけ 168

引っ越し流行り 174

虚栄の市 179

新幹線 185

先住民 191

国際個人主義 197

スーパースター諸君！

203

救世軍 209

帰郷 215

テレビ離れ 221

新・上海事情 227

分裂の節理 237

活字離れ 243

文庫版へのあとがき

249

居酒屋の正論

居酒屋への回帰

秋が深まってくると、どんなに勢いのいい有卦^{うけ}に入っている人でも、なんとなく心細くなるものだが、ここ数年どっちを向いても冴えない顔ばかりだ。

去年の今時分は、土鍋が異様な売れ行きを示したものだ。不況に伴う経費削減で、真っ直ぐ帰るしかなかった男共を迎えた家庭で、原価の低い鍋料理が流行^{はや}ったそのせいだと、マスコミはしたり顔で解説してくれたが、私は半信半疑だった。

それはたしかに、交際費の請求は一切だめ、タクシー・チケット廃止となれば、サラリーマンとしては夜の行動様式を変えないわけにはいかないだろうが、さりとて長年にわたっての“ちよっと一杯”がそうあっさり改まるはずがあるまい、と思っていたら、案の定だ。

穴へ潜って一時避難していたモグラが頭を覗かせるように、サラリーマン達の“ちよっと一杯”に復活の気配があるらしい。

といって、銀座や赤坂、六本木、あるいは北新地、中洲、薄野にかつての殷賑いんしんが戻ってきたかといえ、そんなことはない。空車のタクシーが虚しく行列するだけで、人通りはまばら、道はガラガラといった状態が続いて既に三年余を数え、まだ当分は冬の時代から脱け出られそうにないと聞く。

ではサラリーマン諸君はいつたいどこで「ちょっと一杯」を再開しているのか。横丁の路地裏でさびれたままになっていた居酒屋風一杯飲み屋が、このところどこもかしこも俄かな繁昌なのだそう。

その証拠を一つ挙げると、売れ行き不振で悩んでいた若手サラリーマン対象の雑誌が、窮余の一策として、自分の懐で払える値頃な店（客単価五〇〇〇円以下）の特集を組んだところ、例月の二割増しの好売り上げを記録したという。

客単価五〇〇〇円という昼のサービスマンランチならいざ知らず、夜一杯やりながらという飲食では、ちょっとしたすし屋では足が出てしまし、フランス料理、イタリア料理、中国料理はまずそれでは納まらない。ということはおでん、やきとり、おふくろの味風の素人料理を売り物にする一杯飲み屋ということになる。

ひところ、テレビのグルメ番組といえ、本場で修業してきたというシェフを擁するレストランや、向こうの超一流店の出店のメニューを恭しく紹介したり、懐石料理店、銀座

あたり的高级すし店などの板前の御託を拝聴するものと相場がきまっていたが、近頃は、ラーメン特集を筆頭に、そば、やきとりなど、言うところの庶民的な「B級グルメ」にその座を明け渡した感がある。

事実、これまで手頃ということで、ちょっとした接待に重宝されていた客単価一万五〇〇〇円見当の小綺麗なカウンター割烹の店が、接待自粛ムードの煽りでバッタリと客足が落ち、しょうことなしに板前に辞めて貰い、代わりにパートの主婦を雇い、女将自ら割烹着姿で包丁を取って家庭料理で勝負、というように模様替えするところが目立って増えた。われわれ昭和フタケタ世代にとって、そういう一杯飲み屋の情景は、まさにタイムマシンで四〇年前の戦後窮乏時代に舞い戻ったような、なんともいえない懐かしくもまた複雑な感懷をそるものだが、バブル飽食の時代に生まれ育った若い連中はまったく違ふ。ヌーベル・キュイジーヌやイタメシ同様、レトロという流行現象の一つに過ぎないのだから、落ちぶれたといった自嘲の影などカケラもない。

落ちぶれた——と書いたが、いまそういつた居酒屋に集い寄って、ワイワイガヤガヤっている中高年世代の飲みっぷりを傍らから眺めていると、そんな僻み^{ひが}つぱい感じとはまったく逆に、むしろ水を得た魚のように生き生きしている。

この人達が、つい数年前までは、今日はフレンチレストラン、明日は一流料亭と、いか

にも場慣れた感じを取り繕い、もっともらしくワインの試飲をして見せ、高級魚の旬を諳^{そらん}じるといった按配だったことを思い起こすと、いささか皮肉な気分になる。

それもこれもすべては背伸び、見様見真似の「雑魚のとまじり」、俄か成り金の俄か贅沢だったことを、彼らの居酒屋でのその寛ぎようが説明している。

熱燗の盃を、顔を突き出すようにして舐める図は、けっして上品とはいえないが、無理がなくていかにもサマになっている。注文する者は湯豆腐に丸干し、それに大盛りのジャガイモのサラダ、肉ジャガが人気の中心で、これが口を開けばいっばし食通ぶって、たべものの講釈をしていたのと同人物とはとても思えない変わりようだ。

それにしても、あれはいったいなんだったのだろう。分不相応といえばまさにその通りで、食い物に限らず身につけるもの、住まい、スポーツ、遊び、旅行と、どれ一つとっても、昭和三〇年代には想像さえしなかった「桂馬の高飛び」のような上昇志向の連続だった。そしてそんなふうにすべてがグレードアップしていくことに、いささかの不安も覚え、それを不自然な変化だなどとは思ってさえもみなかった。

その三〇年間の上昇一途が、突然はたと止まり、あつと気がいたら元の木阿弥の三〇年前にボンと戻って、その頃とそっくりそのまま、丸干しを齧りながら燗酒を啜っているのである。

あれだけ、われもわれもと草木も靡く勢いだったゴルフブームも嘘のように冷え、コースはガラガラと聞く。

私はゴルフをやらないから彼らの本音はよく分からないが、本当にゴルフが好きだったら、そうあっさりと行かなくなったり出来ないのではないか。ということは、プレイフィーが惜しいというのもたしかだろうが、本当のところはそれほどゴルフ好きではなかったのでは？ という気がしてならない。

つまり「見栄グルメ」と同じことで、その機会が遠ざかり出すと、さほどの未練も示さず、離れてどうとも思わなくなるのである。「金の切れ目が縁の切れ目」になるのは浮気沙汰と相場はきまっついていて、本物の色恋だったらそうはいかないというのによく似ている。この三〇年間の経済繁栄、それに伴う消費生活の拡大、それはあたかも、新しい文明を創造するのではないかと錯覚するほどの勢いだったが、ひとたび失速すると、それらのほとんどが夢まぼろしであったことに気づかされるのだから、人間の営為のなんと虚しいことか。

しかし、少なくとも私は、こういう状態に戻ったいまの日本を居心地がいいと思っている。分不相応に舞い上がった人間共が肩で風を切っている図を見ないだけでもいいし、フラ

ンス料理もイタリア料理も料亭のメシも願ひ下げにしたい本音を、押し隠さないで済むだけでも有難い。

おでんに爛酒が嬉しい季節になった。居酒屋に男達が帰ってきた日本も満更ではない。

政治のコスト

政治改革の一環として、企業、団体の政治献金を段階的に解消していき、その代わりとして国民一人当たり年間五〇〇円相当額の六〇〇億円を政党助成に振り当てるという案が連立与党間でまとまったという。

民主主義政体下の政治コストを国民が負担するのは当然のことだという考えから出たことなのだろうが、ちょっと待って頂きたい。

政治にコストがかかるのはたしかなことではあるが、そのコストを細かく分析した上でのことかといえ、どうやら違う。政治家一人一人が、年間どのくらいの金額を政治活動に注ぎ込んでいるかといえ、これはまさにピンからキリのようにだ。

たとえば、選挙になると、立候補届出をし、選挙公報に名前を載せ、最低枚数のポスターを公示パネルに貼りはするものの、街宣車はおろか、選挙運動期間中、一切の運動を行わず、その間海外へ行ってしまうというタレント議員が必要とする政治資金と、選挙のた